〇名の渡來、一九二八年のオレクマ河地方よりの五〇名の渡來など。こうして現在では、大興安嶺の中では、デルブル河の上流からビストラヤ河流域、アルバジハ河の上流地方にかけての、およそ六万平方キロの地域に二五〇名ばかりのトナカイ・オロチョンが、九〇〇頭ばかりのトナカイとともに、モーホ、キラムト、三河の三集團にわかれて生活しているのである。平均すれば、一〇〇〇平方キロに対して三人足らずの稀薄な人口密度である。シベリアにおけるかれらの生活には、いつとはなくロシア風の様式がはいりこんでいた。女の上着、ブラウスやスカート[1]、頭にかぶるプラトーク、男の着るルパシカや背廣などにとどまらず、食事においてもパンをたべ、紅茶をすするなど。政治的には、ちょうど馬オロチョンが清朝から旗組織をあたえられたように、トナカイ・オロチョンはロシア人からアタマン組織をあたえられ、宗教的にも在來のシャーマニズムにかわって、あるいはそれと平行して、ギリシャ正教がゆきわたってきたのである。[2] これらの新らしい生活様式は、かれらの移住とともに、そのまま大興安嶺のなかにも持ちこまれ、シナ人との接触がはじまってのちも、ロシア語、ロシア文字などとともに持ちつづけられてきた。われわれがみた墓も、在來の風葬にかわって、このように新らしく取りいれられたロシア文化の影響をしめすものであった。

しかし、このような外見的な変化にかかわらず、かれらの基本的な生活様式、すなわち「狩猟＝トナカイ飼養」という面では、たとえシラカンバの弓矢が銃にかわったにせよ、根本的には、なんの変化ももたらさなかったという点は、注意にあたいする。なにゆえにかれらは、ロシア人を見ならい、狩猟をすてて農耕に轉じなかったのだろうか。かれらの同族の一部、たとえばザバイカルのツングース族は、すでにモンゴル化あるいはロシア化して、遊牧または農耕生活に轉向しており、満洲でも、ノンニの河谷に住むソロン人は、いまではすでに農耕をおこない、あるいは急速に農耕生活へ移りつつある。さらに、西ホロンバイルに住むソロン人は、モンゴル人の影

響をうけて遊牧生活に移行し、狩猟はもはや附帯的なものになってしまっているのである。それにもかかわらず、大興安嶺のオロチョンはもとより、シベリアにおいてさえ、バイカル湖附近からヤブノロイ、スタノヴォイをへて、カムチャツカの山地にいたる廣大な地域に、トナカイ飼養＝狩猟の世界は、いまもなおツングース族によってくりひろげられているというのは、やはりこれらの地域に、この生活様式の維持につごうのよい、あるいは他の生活様式の採用を困難ならしめるような條件が、存在していると考えないわけにはゆかないであろう。

その條件のひとつは、自然環境であると考えられる。これらのトナカイ飼養＝狩猟の世界が成立しているのは、ツンドラ的な植物景観をふくんだ森林帯を主体としており、ここには、ツンドラからひきつづいて地衣類がおおく自生してトナカイの飼養を可能にするとともに、ゆたかな森林の野獸類をもって狩猟生活にも適している。しかも寒冷な氣候は、安定した農耕生活には不向きである。一方、森林と地衣類との共存は、ツンドラ地帯に見るようなトナカイの大規模な放牧だけによる生活をも困難にしている。いいかえると、かれらのトナカイ飼養＝狩猟の生活こそは、この地域の自然環境にもっとも適應した生活様式であり、この地域にとどまるかぎり、たやすくは他の生活に轉向しがたい性質のものと考えることができる。

條件の他の一つは、外部世界の入りこみかたである。ロシア人との接触は、かれらに貨幣をおしえ、メリケン粉や衣類をおしえ、かれらの狩猟を、直接的な生活必需品の生産から轉じて、貨幣獲得の手段に変化させた。こうしてかれらは、自給的な閉鎖社会から一轉して、商品としての毛皮生産者になったけれども、その貨幣獲得は、單に日用品の購入を目的とするにとどまり、貨幣の蓄積それ自体を問題とするところまでは到達できなかった。かれらの財産は依然としてトナカイであり、貧富の判断はその頭数によって決定される。このことは、ひとつには、商品生産を含めてのかれらの生活が、トナカイに依存すること大であるにもかかわらず、外部の世界か

らこれを買い入れることが、不可能もしくは困難であったことにもとづくのであろう。それにまた、毛皮を生産しさえすれば、従來どおりの生活様式が若干のうるおいまでつけて維持されるかぎり、貨幣に対するそれ以上の魅力もなく、いわんやこれをもとめて、危険をおかしてまでちがった生活様式を採用しようとする意欲は出なかったであろう。またこの問題には、さらにべつの條件がつきまとう。すなわち、かれらの生活地域は、農業不適地であることと関連して、鉄道そのほかの交通網の発達がさまたげられ、林業などの産業の発展もおさえられている。これは、かれらの生活環境をもとのままに保存するとともに、ほかの多様な生活様式との接触の機会をすくなからしめている。かれらのおもな関心は、トナカイの数の維持と、野獸の減少とにそそがれるだけで充分であり、かれらの知らない世界に組みたてられている経済機構が、毛皮の商品價値を他の物資にくらべてひどく低落させないかぎり、その生活は満足におこないうるものであった。野獸の減少した場合でも、ちょうど満洲へ移住してきたときのように、同様な條件の土地を新らしくさがすことによって、これまでどおりの生活を維持することも、場合によっては可能であった。

このようにみれば、かれらの生活様式を変化させることのできるものは、さしあたり、さらに強力な外的條件の変化のなかにもとめなければならないであろう。森林の開発や、いっそう精巧な銃器の供給などによる野獸の減少、なにかの原因によるトナカイの減少や経済機構の変化など、これらの現象が狩猟による生活の維持を困難ならしめるまでは、オロチョンたちは、依然としてタイガを舞台とし、農耕社会や遊牧社会と肩をならべて狩猟社会を展開し、これらの社会とたがいに地域をすみわけることによって、それぞれの土地利用の役わりをはたしてゆくであろう。たとえ狩猟による土地利用が、いかにも低能率であることは否定できないにせよ、他の方法が発達する道がひらかれるまでは、それがやはりこの地域においてもっともふさわしい、最高度の利用方法をとっ

ている人間のいとなみである、といわねばなるまい。（以上一〇節　森下）

〔註〕

① われわれが、かえり道にみたオロチョンのなかには、ストッキングとハイヒールとをもっている娘もいた。女の衣類は、ふつうじぶんでしたてる。女たちは、ぬいものがうまく、手藝にもたくみで、一四―五歳の娘時代から、衣類をしたて、しゅうをする。なお、冬の衣類だけは、ほとんどハンダハン皮製で、綿服はすくない。頭には、ハンダハンの耳でつくった防寒帽をかぶる。

② オロチョンたちは、キラムトへでて、牧師から洗礼をうけ、クリスチャン・ネームをもらう。ユルタごとにキリストの額をかざり、朝夕十字をきって礼拝する。

チーリンジの生態

棲林集（チーリンジ）の村は、四戸からなっていた。ほかに空き家が二軒、それに警察隊の倉庫があって、これをわれわれの宿舎にあてた。四戸のうち「張」「孫」および「郭」という三人は独身で、「方」だけが妻と子どもふたり、やとい人ひとりの五人ぐらしであった。方の妻はロシヤ人とシナ人との混血である。開拓のはじめから住んでいるのは方だけで、ほかはあとからの参加者であった。

耕地は、全部で七天地半あった。① このうち、方は二天地半をもち、張壌修は三天地、孫と郭とはふたりいっしょに二天地を耕作している。しかしこのうちで、耕地をじぶんの所有にしているのは方だけで、あとの耕地は、すべてモーホにいる張学明という男の所有である。というのは、ここの開拓者は張学明と方とのふたりだったので、だれにも属しないこの土地は、ひとりでにふたりの所有となった形であった。

おどろいたことには、この地主の張学明が、われわれのやとってきた馬夫のひとりであった。ロシア語ができ、チーリンジへの道を知っているといった老人の張(チャン)がそうであった。おなじ老人であるチャン・クェイ・タンと区別するために、かれの通称にしたがって、老頭兒(ラオトル)とよぶことにしよう。ラオトルのものがたる身のうえばなしは、そのままこの村の成立の歴史であった。

ラオトルは、もともと天津の西方の百姓の子にうまれたが、一八歳のときから大工をならい、二九歳から三〇歳まで天津の町でそれによって暮らしをたてた。そののちハルビン、ハイラルをへて満洲里にゆき、五年あまりやはり大工で生活していたが、そのころモーホの対岸のイリフリに住んでいた同郷の者から、大工不足だからこないかというさそいをうけ、シベリア鉄道経由でやってきた。一九一八年のことである。一九二〇年になって、かれはモーホにうつり、山中を砂金をさがしてあるきはじめた。ゴールド・ラッシュにいたたまれなくなったのであろう。足を棒にしてあるいたかいがあって、かれはとうとうひとつの砂金坑を探しあてた。チーリンジに近いターリンホのほとりの、連盛溝金坑である。かれはさっそく廣信公司にとどけ、人をやとって金掘りをはじめた。しかし、なによりの障害は、この山中に食糧を輸送することの困難さであった。そこでかれは森林帯の中で、金坑近くにめぐまれたこの沖積盆地に眼をつけ、そのころまったくの原野であったチーリンジに、耕地を開拓しようと決心した。百姓の家にうまれたことが、この決心にあずかって力があったのであろう。あくる一九二一年、かれはこの草地に最初のくわを入れ、以後夏だけここで開墾に従事することにした。ややおくれて、おなじ採金なかまの方が、これにくわわった。二年たって、ラオトルは金坑を廣信公司の手にまかせ、モーホへ引きあげたけれども、夏の耕作だけは継続した。金坑を放棄したのは、おそらく採金高と金價格との関係から、経営がむずかしくなったためであろう。

チーリンジ附近は、モーホ・オロチョンの集合地であった。チーリンというのは、もともとオロチョンをさすシナ語である。かれは、必然的にオロチョンとも交渉をもちはじめた。シベリアでロシア語をおぼえてきたことが、この場合に役に立った。かれはオロチョンから毛皮を買い入れ、メリケン粉・茶・塩・布類などを賣りつけた。そのころハンダハンの皮一斤について、一円で買ったということである。この新らしい商賣はかなりながくつづき、そのあいだに妻や子どもたちを郷里からよびよせることもできた。しかし一九三四年、満洲國の行政組織がこの山奥にまで滲透して、オロチョン相手のかってな交易ができなくなったために、ついにかれはチーリンジの耕作をも放棄して、モーホで買った農地での生活に専心するようになったのである。チーリンジにおけるかれの耕地の一部は、おなじくオロチョンとの交易のために、一九二三年以來ここにうつり住んでいた張壤修がひきうけることになった。張壤修は、ここにくるまではモーホで農業をやっていた経験者であったから、オロチョンとの交易が禁止されたのをしおに、ふたたび百姓しごとにかえることにしたのである。もうひとりの住民である郭は、一九二九年からやはりモーホで百姓をしていたが、一九三五年以來ここに移り、張学明ののこりの耕地を借りうけて農業をつづけ、孫がこれにくわわったものである。これらの住民のほか、一九三三年にモーホからひとりで移ってきて、半農半猟の生活をしていた王惠德という男がいたが、けものが少なくなったために、ふたたびモーホに引きあげてしまった。なおそのほか、ニコライというロシア人も、一九三六年から二年間、ここで農業をいとなんでいたということである。

ラオトルは、このようにチーリンジから去りはしたけれども、土地の所有者であるという関係から、それ以後もときおりここをおとずれていたようである。かれがみずから進んでわれわれの隊の馬夫にくわわったのも、このようなチーリンジとの結びつきからであった。現在はまだ耕作のおよんでいない土地も、やはりじぶんの所有

であると、かれは考えているらしく、ほかの者もこれをみとめている。しかしなかには、それはやはりはじめて開墾する者の手に帰するはずだ、と主張するものもあって、その所有権は、かならずしも確定してはいない。

これらの村の歴史を通じて、興味のあることは、チャン・クェイ・タンの場合もそうであったように、ひとびとが、いともかんたんにしごとを変え、すまいをうつしているということである。それは、金坑の衰微、金の價格の下落、政治的な強制力などの、直接の結果であるにはちがいないが、やはりフロンティアの開拓民のひとつの性格のあらわれであろうとおもわれる。村の成立そのものも、はじめから、採金・交易・狩猟などの、ちがった世界との結びつきから出発しており、じゅんすいの農村というよりは、多角的な、もしくは中間的な性格をもってうまれてきたものである。そして、変動性にとんだ、これらの奪略産業との結びつきは、できあがった農村自体の安定性をもおびやかし、ひとびとの移動をも、ますますおおきくしているのである。これも、農業限界地域としてのタイガのもつ、ひとつの性格であろう。

チーリンジの農業は、およそ穀物栽培の経済的に成立しうる最低の氣候的條件のもとにおこなわれている。ふつうの年には、四月にはいるまでは、アルバジハ河のうえをそりが自由に通れるし、終霜は五月にはいってからである。五月下旬になって、耕地の表土はようやく一尺ばかりとけ、はじめてすきおこしができるようになる。たがやした土には、コムギ、ジャガイモをまきつける、六月にはいるとエンバクの種まき、そして收穫は、八月下旬にエンバクとジャガイモ、九月上旬にはコムギ。もう九月にはいれば初霜をみるようになる。やがて中下旬ともなれば初雪、そして池などには氷がはりはじめる。一一月中旬には、河も完全にこおり、そりもとおれるようになる。冬の積雪は五〇センチぐらいである。無霜期間は、わずか一一〇日にも足りない程度であり、しかもこのような寒冷地域では、ちょっとした氣溫の変動でも、農作には致命的な影響をあたえる結果となる。たとえ

ば、昨年も七月中旬になってから晩霜にみまわれ、コムギやエンバク、ジャガイモにまで被害をうけ、一昨年もおなじころに軽くこおったので、方の畑では、この二年間コムギはほとんど収穫できなかったという。

土地はもちろん、永久凍土層の分布地域内にあるから、氣温の上昇とともに、表面がわずかにとけるだけである。夏になって凍結のとける深さは、野地坊主に水のたまった濕地で六〇—九〇センチ、水がなければ九〇—一二〇センチ、かわいた草地で一二〇—一五〇センチ、耕地で一八〇センチ、われわれが到着した六月はじめでは、耕地の下一二〇センチくらいまでは、まだこおっているという話であった。もっとも、地表に草のおおいがなければ、夏は三〇〇センチくらいまではとけるという。

このような氣候條件のもとでは、作物の種類もおのずから限定されてくる。穀物では、シベリアと同じく、コムギとエンバクとの組み合わせ、ほかの主食としてはジャガイモだけで、そのほかにアサ類がすこしと野菜類。野菜の種類はかなりあって、ダイコン、ハクサイ、ネギ、ニラ、ホウレンソウ、キュウリ、トウガン、エンドウなどが栽培される。一天地あたりの平均收量は、コムギで六〇〇斤、エンバクで一〇〇〇斤というから、換算すれば反あたりコムギ三斗、エンバク五斗ばかりにすぎない。[2]

耕地は、野地坊主のある地面をえらんで開墾されている。ラオトルの話では、野地坊主の土は色も黒く、粒もこまかくてよい土であるし、開墾の労力もすくなくてすむという。もともとわずかの家畜頭数しかもたなかったかれらには、この労力の問題は重大であったにちがいない。四軒あわせて馬は五頭、ニワトリ三〇羽、ブタ四頭、イヌ二頭、ガチョウ一羽というのが、現在の総家畜数であった。そして、この家畜数の不足のために、開墾しうる余地をじゅうぶんにもつこの盆地で、かれらは、わずか七天地半の耕地をそれ以上ひろげることもできず、ややもすれば、食糧の自給さえもおぼつかない狀態においこまれているのであった。ラオトルが開墾に成功したの

は馬四頭をもっていたためであり、馬をもたなかった方は、おくれてはいり、それもいまでは、その生活の維持すら困難になって、この冬はモーホへ引きあげる決心さえかためるにいたっている。じっさい、二年つづきの不作に、方はモーホまで食糧配給をうけにいって、ようやく露命をつなぎ、この冬は馬にも洋草[3]だけしかくわすことができなかったのである。

この地の耕作は、つぎのとおりにおこなわれる。まず五月の中下旬ごろ、凍土が三〇センチばかりとけると、犁を用いて耕地をすきかえし、それがおわると杷を使って草をのぞく。これは矩形に組みあわせたわくの長辺に、長い釘をそれぞれ一列に立てならべた、一種のハローである(図62下)。除草がすめばすぐ種まき器で種をまき、おわればラオで土をかぶせる。ラオは、種まきまえの地ならしにも、まいたあとの土かぶせにも使うもので、くしのような形をし、その歯にあたる

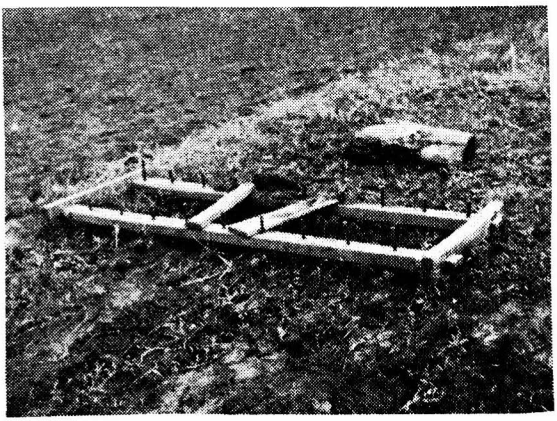


図 62. チーリンジの耕作.
上(ラオの使用), 下(杷).

部分がヤナギの枝でできている（図62上）。これらの農具は、すべて馬にひかせるが、犁は馬二—三頭びきで一天地に一日かかり、耙は三頭で一天地一日、ラオは一—二頭で一天地半日たらず、全過程はほぼ三日で、コムギ、エンバクともおなじである。われわれが到着したときは、コムギがすみ、エンバクのまきつけ時期であって、三頭びきの耙やラオを、ひとりが馬の口をとり、ひとりが農具のおもしに乗るか、またはかわりに石をつんで、しごとにはげんでいた。

芽がでてからは、鋤頭（タオトウ）と名づける金属刃の除草具で、雑草とりをする。これは人力でやるので、ひじょうな労力を要し、一回の草とりに一天地六—七日もかかる。

こうしてコムギ、ジャガイモ、エンバクとひととおりの種まきがおわれば、收穫までのあいだに、冬の飼料にそなえて草刈りにかかる。草刈りは、鐮刀（シャンタオ）という大鎌をつかい、ひとりで一日に五〇—六〇プード（七五〇—九〇〇キロ）ぐらい。かりとってから釵子（チャーズ）でかきあつめ、日に干し、かわいてから束にしておく。

またたくまに收穫期がくる。八月すえから九月のはじめにかけて、ジャガイモ、エンバク、コムギなどほとんどいっしょである。穀物の刈り取りには、鐮刀という鎌をつかい、一天地に四—五日はかかる。刈ったものは、たばねて地面にひろげ、一〇日ほどかわかす。かわけば、クンズというローラーを使って脱穀する。これには、馬を一—二頭で一天地分四—五日。おわれば麻袋につめて、これでひとまず完了する。これが一〇月なかばごろである。とり入れがすむと、あとは冬しごとである。枯れ木をのこぎりでひいて薪にし、雪のあるときにそりではこんだり、とおくの乾草をはこび入れたり、コムギ粉を磨（モ）というすでひいたりする。

このように、夏がみじかいため、わずかの耕地であるにもかかわらず、しごとはひじょうにいそがしい。人手も足りず、馬も足りないとすれば、耕地をふやすことは望むべくもなく、それがまた制約となって、家畜をふや

すことがむずかしい。冬は、雪のために、家畜を放牧できないので、飼料を多量にたくわえておかねばならないからである。

こんなにおしつめられた、あわれなチーリンジの農業を、わずかにささえているものは、ちょうどその成立のときにもそうであったように、この附近におけるほかの産業である。ラオトルの発見した連盛溝とおなじターリンホの河すじに、オロチョンのサンカが発見したといわれる富克山金坑では、いまおよそ八〇人の採金夫がはたらいているほか、この附近には、かなりの森林伐採人夫もはいりこんでいる。木は、いかだにくんで、アルバジハ川を流すのである。伐採人夫たちは、エンバクや洋草を高價に買い入れる。昨年郭は、エンバクを一プード六円で七—八袋、洋草を一プード八〇銭で二〇プードも賣った。金坑のほうではまた、ジャガイモや野菜などの需要がおおい。方は、ジャガイモを一プード六—七円で四〇—五〇プードも賣り、ハクサイもおなじ値で一〇〇プード賣りつけた。卵も一個四〇銭で、年に二〇〇—三〇〇個賣っているのである。昨年は、ブタも賣った。收穫のとぼしさを、なんとかおぎなって、かれらの生活を維持しているのは、毛皮がなくなったのちのいまでも、やはり砂金や木材であった。そして、これらの変動性のおおい不安定な産業にささえられた投機的な性格こそ、タイガの農業の特色ともいうべきものであった。(森下・川喜田)

〔註〕

① 一天地は、およそ〇・六五ヘクタール。

② 二斤は一キログラム。作付面積のわりあいは、方の畑で、コムギ一天地、ジャガイモ半天地、エンバク一天地、張壤修の畑では、三種それぞれ一天地ずつであった。

③ イネ科、カヤツリグサ科の草本でつくった乾草である。

うたがわれた日本人

六月七日から九日まで、われわれはチーリンジに滞在した。村の調査のほかに、オロチョンやとい入れの問題があったからだ。わたくしは、ヤーゴやルカシカにたのんで、オロチョンたちが通りかかったら、すぐつれてきてくれとたのんでおいた。

到着のあくる朝、村をひとまわりしてかえってみると、もうちゃんと、ひとりの中年のオロチョンがあらわれていた。背がたかく、こわい顔つきで、戦闘帽に作業服をつけ、ひざのうえからひもで腰につるす皮のももひきをはき、そのうえにゲートルをまいていた。これが、れいのフクシャンの金坑をみつけたというサンカであった。サンカは、ラオトルの最初の取引き相手だったという。かれについで、こんどは、一八—九のおとめが、ひとりの少年をつれてあらわれた。かの女は、サンカの娘で、イレーネといい、少年のほうは、ラジーメというオロチョンの息子で、ショーリカとよばれた。イレーネは、ながい外とうのえりもとから、はでな上着をのぞかせ、皮の手ぶくろを手にさげていた。わたくしは、かれらにパンなどをごちそうしたうえで、同行をすすめてみたが、かれらは、ヤーゴと相談してみるからといって、立ちさってしまった。ヤーゴは、このとき、どこかへ姿をけしていたのである。

村のすぐそばには、アルバジハ河の本流がながれている。河はばは、一五〇メートルもあろうか(図102)。両岸にすこしばかりの河原をのこして、ほとんど河はば一ぱいにながれてゆく。この村のすぐ上流で、アルバジハは、ターリンホ、クーリンホ、ロチョウコウなどの、いくつものおおきな流れにわかれる。われわれのめざす基

地は、ここからほぼ南にむかっているロチョウコウをさかのぼった、その水源にあった。あとにのべるオロチョンの移動路のしめすように、いくつもの大支流の交点にあたるここは、オロチョンの交通路の交叉点にもあたっていた。岸に立っていると、一そうの小舟に、ひとりのオロチョンがのりこんで、ゆっくりと流れをさかのぼってくるのがみられた。舟の長さは七—八メートルで、木のわくにシラカンバの皮を張ってつくられている（図版一六ページ左上）。かれらは、この舟をオムローチンとよび、いつもは河岸にかくしておいて、必要なとき引きだしてつかう。ふつうの大きさなら、四人のれるが、つくるのはかんたんで、ふたりがかりで二—三日あればよい。一度つくれば二—三年もち、一家族にひとつくらいずつもっているらしい。深い河をわたるときには、トナカイの鞍や裝具はすっかりはずしてオムローチンではこび、トナカイはまとめて河のなかに追いやるのである。むらがって河をおよぎわたるトナカイが、水面に角の林をゆらめかせるながめは、壯観であった。

午後には、またべつのオロチョンがあらわれたけれども、やはり確答をあたえずに去った。隊員たちは、のんきに、馬にのってあそんでいた。一頭だけ手におえないのがいたのに、騎兵出身の本郷さんは、自信ありげにのった。たちまち馬はねこのようにおとなしくなり、感心してながめているまえを、本郷さんは、しずしずと河のなかにのりいれた。対岸へわたろうというのである。ところが、河のなかほどまできたとき、馬はとつぜん立ちどまり、あわてる本郷さんをのせたまま、水のなかに横になってしまった。一同は腹をかかえたが、流れさろうとする鞍のうえの毛布などをすくうのに、あとはおおさわぎとなった。夕ぐれには、松本さんや川添が、三日月沼で、なん匹かのフナを釣ってきて、ひさしぶりの魚料理にありついた。もっとも、味は感心するほどのものではなかった。

つぎの朝にも、またまたオロチョンがやってきたが、結果はおなじであった。いかにここがオロチョンたちの

中心地とはいいながら、ひろい地域にちらばっているはずの少数のかれらが、あまりにもひんぱんにあらわれるのに、わたくしはおどろいてしまった。じつは、そのときはまだ知らなかったが、対岸の小さな支流を数時間のぼったところに、何家族かが集結していたのであった。しかし、オロチョンたちの態度には、なんとなく不安を感ぜずにはいられなかった。連絡のはやいかれらのことだから、われわれの希望もすでに知っており、ヤーゴから話もきいているにちがいなかった。だが、ほかの話をするときは、あいそよく應対するのに、かんじんの問題になると、申しあわせたように、ことばをにごして、あいまいになってしまうのだ。姿をみせたヤーゴにたずねてみても、オロチョンたちは、あまりゆきたがらない、というばかりであった。なんとかうまく話をつけてほしい、とたのんでも、相談してみますというだけで、熱心さはまったくみられなかった。ルカシカだけはべつとしても、かれらのあいだに、なにか共通した感情のわだかまりがあることはたしかであった。そのルカシカも、いまはどこかへ消えてしまっている。かれらは、いったいなにを考えているのだろう。チャン・クェイ・タンにさえ、その原因は理解できなかったのである。

九日の朝になって、サンカとヤーゴがふたたび顔をみせ、いっしょにゆくわけにはゆかないと、ことわりをのべた。わたくしは、関さんとラオトルとを通訳に、そのわけをたずねた。ヤーゴが、サンカにかわって、いろいろに説明した。トナカイが足りない、いまは暇がない、人が足りない……。どれもこれも、わたくしにはなっとくできなかった。もっとほかの原因が、もっと根本的な原因があるにちがいない。わたくしは、さまざまに、つっこんできいてみた。賃銀が足りないのかときけば、そうではないという。われわれが氣にいらないのかといえば、そうでもないという。なにをとりあげてみても、ヤーゴはことごとく否定し、しかも頑強に同行をことわった。オロチョンやとい入れも、もはや失敗かとさえおもわれたが、わたくしはまだあきらめきれなかった。

とうとうさいごにヤーゴが口をすべらし、まえにじぶんたちをやとった日本人は、約束しておきながら、賃銀をはらわなかった、といった。これだった。わたくしは、たちまち了解した。かれの氣もちのそこにあるものは、まさに日本人に対する不信の念であった。アムールの船上のボーイのことが、ふと頭をかすめた。わたくしが口をつくしても、ヤーゴの不信の念は消えず、どうしてもだめだ、といいはった。ここまでくれば、事態はもう絶望的だった。

このとき、チャン・クェイ・タンなら、この事態をすくえるかもしれない、という直感がひらめいた。チャンさんは、ちょうどでかけていて、居あわせなかった。関さんが、あわててとびだしていった。まもなくつれもどされたチャンさんに、わたくしは手みじかに事情をはなし、たすけ舟をもとめた。かれは、ヤーゴに話しはじめた。話は、身ぶりをまじえてるとつづき、ときとして澁面をつくり、ときとして笑顔で語った。ヤーゴは、はじめはなんども抗議したが、しだいにしずかに耳をかたむけはじめた。話はほとんどわからなかったけれども、やがてチャン・クェイ・タンが語りおわったとき、ヤーゴの表情はおだやかになっていた。「ゆくことにします」とヤーゴはいった。ただし、トナカイはたくさんは出せないが、ルカシカのぶんを入れて三〇頭ぐらいに、六人オロチョンをつけるなら出そうといったが、さらに話しあったすえ、三四頭まで譲歩した。そのかわり、男は三人だけで、あとの三人は女と子どもでいいかときいた。わたくしは承知して、協定は成立した。オロチョンたちは、明朝出発時間までに、トナカイをつれてここにくることになった。わたくしは、ようやくほっと息をついた。

トナカイとともに

チーリンジ出発の朝になった。トナカイがやとえることになったので、二三頭の馬のうち、九頭だけをのこして、のこりはモーホへかえすことにした。馬夫も、半数にへらして、しごとぶりのまじめな六人だけをつれてゆくことにした。ラオトル(張学明)、おかま帽、……そのほか。シナ人の名まえをおぼえるのはめんどうなので、もっぱらあだ名が通用していたのである。オロチョンたちもやってきた。サンカ、ルカシカのほか、あたらしくニコライという男、アトケイという婆さん、それからせむし娘のマリーネと、ショーリカ少年とがくわわった。ヤーゴは参加しなかった。

積載量のちがう馬とトナカイとに、それぞれ荷物をふりわけるのにてまどって、出発は一〇時ごろになった。ながい隊列は、まったく奇妙な一行であった。トナカイたちは、あるものはリュックサックや袋を、あるものは箱の形の毛皮製の容器(図版一六ページ左中、図63)——その中にわれわれは米をいれた——を背に、くびに結んだひもで五—六頭ずつ一列につながれて、おとなしくひかれてゆく、くびをふるたびに、さまざまに枝わかれした巨大な角が大きく上下にゆれ、鈴が音をたてた。それぞれの群れの先頭に、オロチョンたちが一人ずつたづなをとっている。アトケイ

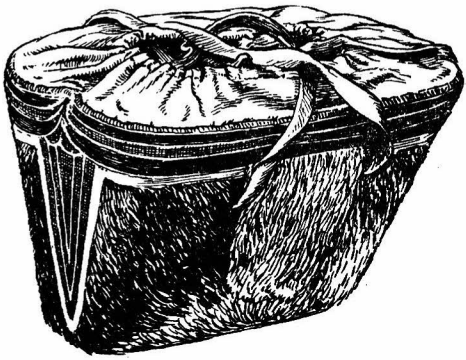


図 63.　トナカイの背につむ容器. ハンダハンの毛皮でつくり，染めたなめし皮で，かざりをつけてある.

婆さんは、銀髪をふり乱し、長い外とうとももひき、なめし皮の靴に、長い杖をついて、やや前かがみに、それでもしっかりと歩いてゆく。マリーネもおなじ服装で、頭にプラトークをかぶり、背中のこぶにおされながら、トナカイの角のまえを小走りに足をはこんでいる。そのからだつきと陰氣な顔、ぎょろりとした眼は、おとぎばなしの魔女をおもわせた。そういえば、杖をついたアトケイ婆さんの姿も、年とった女魔法使そっくりにみえた。彼女たちを護衛するかのように、ニコライが大股にあゆんでゆく。帽子をかぶり、口ひげをはやしたその顔は、ロシア人そのままで、ルカシカやサンカの氣のよさそうな顔つきとちがって、だまりこくったむずかしい表情であった。馬夫たちは陽氣で、おかま帽は鼻うたなどをうたっている。チャン・クェイ・タンはあいかわらず、飄然と杖をついて一行のあとにしたがった。

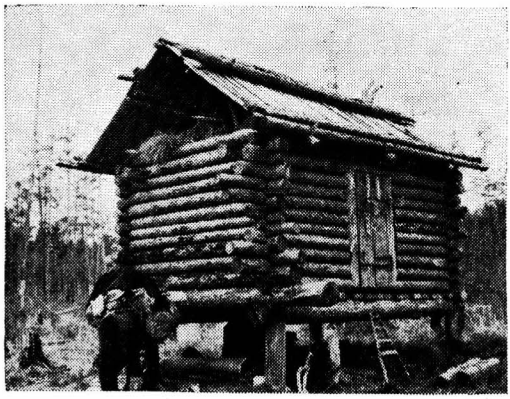


図 64. 大興安嶺の丸太小屋．上（シナ人のもの．アルジャンの宿場の倉庫），下（ロシア人のもの．ガン河の中流．105ページ参照）．

河ぞいの草原をしばらくゆけば、本流とターリンホとの合流点にちかい、アルジャン（二站）の宿場にでる。フクシャン金坑への交通のためにもうけられたもので、チーリンジの農家とおなじく、丸太組みの壁に泥をぬり、カラマツの皮や

板で屋根をふいた、小さい倉庫が立っていた。高いゆか、とびらのつけかたなど、ちょうど正倉院のひな型のようだ。ただし、壁の丸太がけずられていない点で、日本のあぜくら式建築よりは、はるかに原始的ともいえよう（図64）。

ここが、ターリンホの渡渉点であった。アルベジハの一支流とはいえ、川はば一〇〇メートルもあるこの流れを、トナカイや馬は一と群れずつ分れてわたっていった（図版一五ページ下段）。深さはあんがい浅く、ひざぐらいであったが、水はさすがにまだ冷たかった。われわれの行進路は、オロチョン道であった。細いふみあとが、森林をぬけ、谷をわたり、イェルニクのしげみに沿い、ふたたび林にはいってゆく。その通路は、大きな流れをさけて、おもに枝谷のあいだをぬってゆき、ところどころで大河谷にぬけて出る。われわれは、その夜のキャンプを最後として、アルベジハの本流をはなれ、ターリンホからわかれた枝谷の上流をつぎつぎとたどりながら、南下をつづけていった。

オロチョン道が出あうところにはよく、シラカンバの皮にかきつけたロシア文字の手紙が、木の枝にはさんで地面につき立ててあった。これらの手紙は、通りすがりの者の手によって、つぎからつぎへと場所をうつされ、ついに目的地まではこばれるしくみになっているのである。たとえはてしない樹海のなかに分散していても、かれらのあいだには、いつでもよく連絡がたもたれ、いま誰がどの地点にいるかということを、すべての者がたがいによく知りあっており、ほかの家族の移動の道すじも、手にとるようにおぼえていた。

ここで、かれらの移動路の例を、いくつか紹介しておこう。サンカの話では、一九四〇年以後のかれの足跡は、表7および図65のとおりであった。一ヵ所の滞在期間中でも、そこを根拠地[1]として、かなりとおくまで狩りにゆく。たとえば、大ジモイチ滞在中には、ロチョウコウを横ぎりコボリの谷まで、およそ三〇キロの遠方にり

表 7. トナカイ・オロチョン（サンカの家族）の移動路.

季節	場所	直線距離	滞在日数	同行者
1940—41 冬	大ジモイチ川	15km	3ヵ月	ニコライ，ピエトロ
1941 春	カラオク川	10km	2ヵ月	〃 〃
〃 夏	大チマリ川	15km	3ヵ月	ニコライ，ピエトロ，フェリプカン
〃 秋	アルバジハ上流	15km	2ヵ月	フェリプカン，ラジーメ
〃 秋—冬	チンリンジャンシ川※	20km	2ヵ月	ラジーメ
1941—42冬—春	ジモイチ川	10km	6ヵ月	〃
1942 春—夏	オルスクナイ川	30km	1ヵ月	〃
〃 夏	チーリンジ			

※ 大チマリ川の支流である.

スとりにでかけているし、カラオク滞在中には、エリカシ川をさかのぼってアルバジハの源流にいたる、六〇キロの距離まで出猟しているのである。狩りにでる日数は、二—三日からひと月以上におよび、二〇日以上も遠出するときは、ひとりあたり三—四頭ずつトナカイをつれてあるくが、短期間ならば、トナカイをつれず、銃とかんたんな食糧とを背にしてあるく。食糧には、メリケン粉やハンダハンのほし肉をもってゆき、野ネギをとって助けとするという。サンカがチーリンジにあらわれたのも、一時的な出あるきで、家族や家財は、オルスクナイのユルタにのこしてあった。

オロチョンたちの移動は、表7からわかるように、ふつう二—三家族づれでおこない、その組みあわせの顔ぶれは、時により変化する。[2] もっとも、狩りには、かならずしも協同作業を必要としないので、家族ごとにやる。しかし、えものの肉はたがいに分けあうばかりでなく、トナカイをゆうずうしあったり、ときには、毛皮や皮製品の賣りあげ金まで分けあうことがあって、相互扶助はかなりうまくおこなわれ、家族のあいだの生活の差は、ほとんどないといってもよいらしい。[3] 数家族があつま

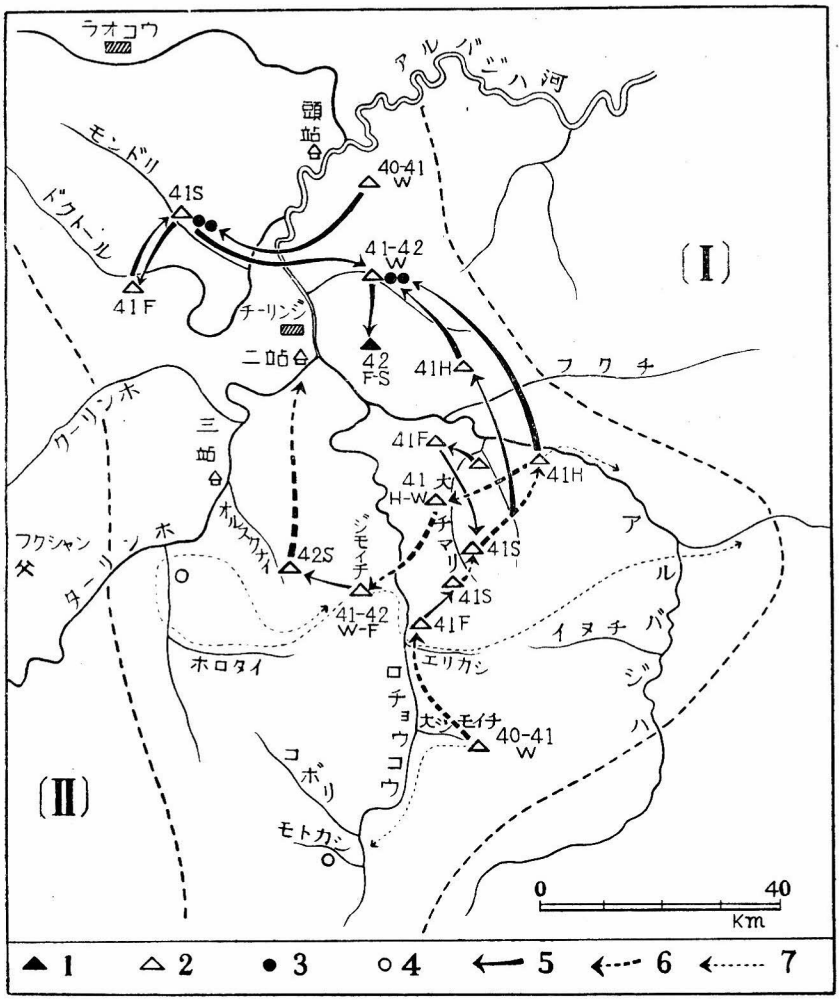
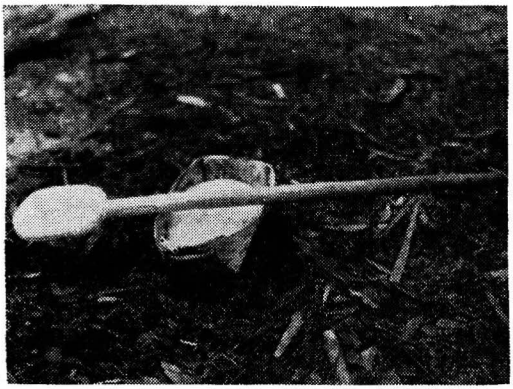


図 65.　モーホ・オロチョンの移動路の数例．1（1942年6月のユルタの位置），2（それ以前にユルタのあった地点），3（現在使用中の倉庫，1941～42年冬の分），4（現在空の倉庫，1940～41年冬の分），5（ユルタの移動路），6（同上，サンカ一家のもの），7（サンカのおもな出猟路）．数字は年度を，F, S, H, W は四季をしめす．〔I〕は1923年ごろから狩りにゆかない地域を，〔II〕はキラムト・オロチョンとの共同出猟地をあらわす．

ったり、わかれたりする原因のひとつが、えものの多少による——多ければわかれ、少なければあつまる——ことも、やはりこのような相互扶助を目的として、集團がつくられていることをしめすものであろう。このような組織によって、かれらは、單独でいるときえものの少ない場合におこる危険を、まぬがれているものと思われる。

われわれがテントをはると、かれらも、そばにユルタをつくった。滯在のためのユルタが、シラカンバの皮などで、りっぱにおおわれている（図版一四ページ上段）のとちがって、布でかんたんにおおいをつくっただけのものである。われわれの配給する粉で、かれらは、ひらたくまるいパンをやいた。やくまえには、シラカンバの皮でつくった容器に粉をいれ、長い柄のついたへらでこね、これに、べつの容器にとってあったパンだねをまぜあわせる（図66上）。パンだねは野生酵母で、毎日こねた粉の一部をつぎつぎとたねにのこしてゆくのである。準備ができると、これをひらたくのばし、まるく



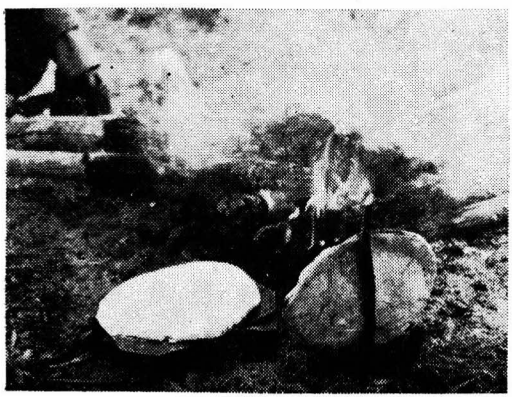


図 66. トナカイ・オロチョンのパン焼き．上（シラカンバの皮でつくったパンだね入れと，木製のへら），下（パンを焚き火でやく）．

して、おなじくらいの大きさの鉄板のうえにのせ、火のそばにおく。てきとうの固さになると、火の横に立てたみじかい棒にもたせかけて、焼きあげる（図66下）。このしごとはおもに女たちがやった。[4]このパンは、フレイベーというが、副食には、シカのほし肉などを用意していた。へいぜいの生活では、肉のかたまりをいれた米のかゆやふかしたメリケン粉の油揚げ（アラチという）、ビスケットなどを食べることもあるという。野菜としては、おもに野ネギをとり、コケモモの実のジャムもつくる。飲料は、紅茶のほか、トナカイの乳をのみ、たばこや、ウォツカ、白酒などの酒類もこのんでたしなむ。食事回数は、一日三回である。

夜になると、男たちは、ときどき狩りにでていったけれども、いつも手ぶらでかえってきた。かれらは、ふつう、シカなどの水のみ場をみつけ、氣ながに一と晩ぢゅう待ちぶせするのであるが、行進の途中では、それだけのゆとりもなかったためであろう。これだけのオロチョンをつれながら、けものがとれないということは、われわれの食事のこんだてにとって、ひじょうな違算であった。チーリンジで買いいれた卵や野菜は、すぐに盡き、松本さんたちがたまに釣りあげる魚をのぞけば、毎日の食事は、ふたたびせんぎり大根と干魚とにもどってしまった。そのかわり、せんぎり大根に関するかぎり、およそありとあらゆる料理がくふうされた。煮つけやみそ汁はもちろんのこと、ついにはせんぎり大根の天ぷらまであらわれ、つきるところを知らなかった。おそらく乾燥野菜のなかで、これほど効用にとんだ、しかもあきのこないものは、ちょっとほかには見あたらないであろう。川添や加藤の苦心は、若かりしころの料理人チャンさんのコーチよろしきをえて、いまやかれらは、当代随一のせんぎり大根の名料理人となりおおせた。

〔註〕

① このような滞在地には、ユルタのほかに、いろいろな設備がもうけられる（ピストラヤ紀行三六一ページおよび図83）。

② オロチョンたちは、氏族組織を維持しているが、ザバイカルのツングースとちがって（シロコゴロフ（一九四一）前出、五七八ページ）、狩猟地域の分割には氏族は関與せず、また狩猟組の構成も氏族とは無関係である。

③ シロコゴロフ（前出、五七二ページ）は、トナカイの流行病の大発生にあたっては、氏族は、その氏族員に属するすべてのトナカイを、各家族に分配することがあるとのべ、これは氏族財産の観念とはたぶん無関係で、不幸のさいの相互扶助の原則を意味するにすぎない、と考えている。われわれのオロチョンの場合も、相互扶助は、あとにでてくるようなトナカイ飼養の危機や、えものの減少にともなう生活の不安定などを通じて、氏族とは無関係に発達したものであろう。

④ ふつうの女のしごとは、食事の用意、家畜のせわ、子どものせわ、獣皮の手入れ、ぬいもの、皮製品つくり（意匠の考案、装飾までふくめて）、野営地の選択（男が狩りなどで不在中にも、しばしば野営地をうつす）、コケモモの実の採集など、單に家事の雑用のみならず、生産活動にも、おおきな役わりを演ずる。

待ちぼうけ

氣温は日ましに高くなり、林は若葉でつつまれた。谷にでるたびに、依然としてヌカガが襲來し、それにブユもくわわった。渓流状の小谷で、流れの石をあげてみると、ブユの幼虫やさなぎが、まっ黒にくっついていた。これがみんな孵化して出たら、そうとうひどい目にあうことになるだろう。それに、夜テントをはると、小さなダニがはいだしてきてくいついた。氣がつかないでいると、いつのまにか血をすってふくれあがり、頭をのこさないようピンセットでとるのが、ひと苦労であった。馬には、鞍がうまくあわないのか、鞍ずれをつくるものが、なん頭もできた。しかし、行進は順調にすすんだ。馬の三分の二ちかくをトナカイにかえたことは、やはり成功だった。ターリンホ以後は、ハナゴケもおおく、小谷のほとりでは、馬のくう野地坊主と、ハナゴケのおおい礫原とが、どちらも近くにあるようなキャンプ地が、たやすくえられたので、馬とトナカイとの習性のちがい

になやまされることもなかった。トナカイは、土地の狀態のいかんにかかわらず、歩度をかえることなくすらすらとすすみ、馬も数がへったので、故障をおこす率がうんとへった。ただ、急斜面の上り下りには、背に固定されていないトナカイの鞍は、前後にずれて、オロチョンたちに厄介をかけた。

六月一四日、われわれは、ターリンホの枝谷から峠をこえて、ふたたび、ロチョウコウがわの支流であるコボリの谷に下った。峠のうえには、はじめてハイマツがカラマツのあいだに姿をみせた。日本アルプスの森林帶に下っているハイマツとおなじく、やはり地表から枝わかれしたまま直立していた。ただ、そのそばにシラカンバがならんで立っているのが、日本の山では見られない風景であった。

われわれは、かねて本隊から、ちかく連絡のため飛行機がくるという、無電による予告をうけていた。一四日の朝の交信は、つぎのような本隊長の指示をつたえてきた。

一、飛行機ハ一五、一六、一七ノ三日間ニ飛來スル。

二、一五日ヨリ行動ヲ停止シ、対空手段ヲ講ゼラレタイ。

三、対空連絡手段ハ、高地上ニ於テノロシ火ヲアゲラレタク、発煙筒モ併用セヨ。

ちょうど一四日の夕方についたコボリ谷のキャンプ地は、川に沿うて、たて四キロ、よこ二キロにわたって、ひろびろとひらけた空き地で、航空写眞でみても、空からわれわれをみつけるのに、理想的な場所であった。われわれは、草地のまんなかに、枯れ枝を山とつみ、いざという場合に火をつけて煙をあげる用意をととのえた。なお、すぐうしろの山の高みに発煙筒を準備し、交代に見張りを立てることにした。一五日のひるすぎ、爆音がきこえてきた。空は一めんに雲でとざされ、機影はみえなかったけれども、それというので煙をあげた。しかし、爆音はすこしのあいだひびいたのち、やがてかすかになり消えていった。だめだった。しかし、あと二日あ

るから、あるいはうまくわれわれをみつけてくれるかもしれぬ。べつに飛行機がきてくれなくても、漠河隊としてはこまらなかったけれども、森林地帯での空地連絡は、すくなくとも探検技術のうえからいって、重要な問題のひとつであった。それに、たぶん飛行機から投下されるであろう慰問品には、單調な食生活のなかで、おおきな魅力があった。

しかし一方、ここで三日間の滞在を余儀なくされることは、そうとうこまった問題でもあった。われわれは、チーリンジの滞在をふくめて、すでに予定よりよほど余分の日数をついやしていた。うかうかするうちに、支隊が基地についてしまうかもしれない、というのが、われわれのなやみの種であった。ここでぐずぐずしていると、一時的にせよ、支隊に失望と落胆とをあたえることになるかも知れない。ちょうど江原と加藤とのつよい希望もあったので、わたくしは、馬三頭・馬夫二人にニコライをつけて、ふたりを先発させることにした。基地についたあと、江原はニコライをつれて、支隊のくる方向に偵察をこころみ、加藤は、基地に小屋をたてることとなった。本隊が着くまでには、まだかなりの日数がいるだろうと思われたから、それまでのあいだ、小屋の利用價値は、そうとうあるものと思われたからである。江原が、夢見を氣にしていたことは、支隊の紀行にもでてくるとおりであった。

あくる日、ふたりは出発し、のこりの者は、また発煙準備をととのえた。きのうよりもすこし早い時刻に、またもや雲のなかから爆音がひびいてきた。こんどのは、音がちいさく、煙はあげたが、爆音は近よろうともせず、そのまま空のかなたに消えてしまった。一七日は、終日待ったけれど、爆音さえもきこえなかった。そして、夜の無電は、

一、本日一二時三〇分、漠河隊及ビ支隊ノ位置不明ニツキ、飛行機ハ引キカエシテキタ。モウ來ナイ。

二、漢河隊及ビ支隊アテノ物糧ハ、本隊デ管理シテアル。

と解読された。なんのことはない、完全な待ちぼうけだった。そのうえ、たのしみにした慰問品は、おあずけをくってしまった。さあ、ぐずぐずしてはいられない。

三日間の休養で、人間はみな元氣はつらつとしていた。濕地でいたんだ靴や衣類のつくろいもできた。ただわたくしだけは、かがとに靴ずれと豆とがかさなって、うみをもち、おもしろくないことになっていた。歩きだしてみると、表面の傷だけがなおって、化膿はおくふかくまで進行していたのだった。しばらくゆくと、とうとうつま先きでしかあるけなくなった。この日の目的地は、モトカシの谷にある、グランフェルト小屋という小屋で、わずか一〇キロほどの行程だったが、そのわずかの道で、疲労困ぱいしてしまった。思えば、まえの腰といい、こんどの足といい、こんどの旅行は、なんの因果でこんなに故障がおきるのかと、なさけなかった。

グランフェルト小屋は、この山中の仮りずまいとしては、あんがいりっぱにできていた。丸太づくりの型式は、アルジャンあたりの家と大差はなかったが、なかには机などをそなえ、独露辞典などものこされていた。屋根うらへあがるのに、そとから破風につくった入り口に向って、丸太にきざみをつけただけのはしごが立てかけられてあるのが、興味をひいた。屋根うらには、大まさかりや、りっぱなフライパンなどの器具が、たくさんおかれていたが、オロチョンたちがなにひとつ手をつけていないらしいのが、山のおきてというようなものを感じさせた。

グランフェルトという人物については、長春いらい、さまざまな傳説的なものがたりをきいていた。ドイツ人というものもあれば、ロシア人というものもあり、オロチョンたちは、この小屋を、「英國人房子」とよんでいる。しかし、ほんとうは、フィンランド人であったらしい。かれは、一九三五年いらい、モーホ・オロチョンの

領域内を、いたるところ歩きまわり、数ヵ所に小屋をたてた。かれの目的はスパイだという者もあるけれども、じっさいは單なる採金業者にすぎず、金坑の試掘がその目的であったと思われる。しかし、あしかけ四年にわたる山中放浪のすえ、かれの姿は、忽然として大興安嶺から消えてしまった。一説によれば、憲兵隊にとらえられたともいうけれども、その眞僞はあきらかでない。あとには、ただ空の小屋のみが、あるじのむなしい努力を象徴するかのように、風雨にさらされ、朽ちるがままに残されている。

この日は、はやく行進をやめたとはいいながら、基地までは、あとわずか二日の行程となった。

基地——支隊きたる

あくる日は、足の痛みはすっかり引いて、わたくしは元氣をとりもどした。前夜、おもいきってメスで切開したのがよかったのだ。小屋の附近をみまわると、すぐ下手のカラマツの疎林のなかに、やはり礫原があらわれていた。このあたりは、山すそのゆるい傾斜地で、礫原よりひくい土地には、カラマツのあいだに、ずっとミズゴケの濕原がひろがり、マメカンバなどがしげって、流れにまでつづいている。礫原は、ラオコウちかくでは、尾根によくあらわれていたが、チーリンジよりこちらでは、一般に、むしろ山腹から谷の濕地までのあいだの、ゆるやかな山すその斜面に出現する場合がおおかった。

道は、モトカシをなかば下り、さらに南に峠をこえて、ボルカシの谷にでる。オロチョン道ではあるが、ところどころに、なた目ではない、のこぎり目がのこっているのは、昨年測量隊のとおったあとにちがいない。いままでにも、このあとは、ずっとつづいていた。食糧がへり、荷物がすくなくなったので、アトケイ婆さんやマリ

ーネは、トナカイにのった。婆さんは、トナカイにまたがりながらも杖をすてず、やはり地面をついてゆく。ちょうど、舟に棹さしているぐあいである。うすみどりの地衣が、一めんにぶらさがった枝の下を、トナカイをあやつって進むアトケイ婆さんの姿は、やっぱり、どうみても魔法使いだった(図版一五ページ上)。

ボルカシで一夜をあかせば、いよいよ基地入りの日である。もうひとつの峠をこえて、とうとうロチョウコウの源流にはいった。峠の山腹には、五メートルばかりの段がついていて、そこをくだるたびに、トナカイたちは、せなかの荷物をずらせた。中央部の山地に特有な、この階段状地形は、これまでの道にそうても、しばしばあらわれた。ロチョウコウの谷は、このあたりでも、まだゆっくりとしたはばをもっていたが、流れはもはや一—二メートルはばにすぎず、チーリンジの近くをながれていた大河のおもかげは、みるよしもない。季節はすでに初夏となり、日が高くなると、暑さをおぼえるほどになっていた。

図 67. ホクマンリス *Sciurus vulgaris mantchuricus* Thomas.

もうすこしで基地というところで、高いカラマツの下枝に、一ぴきのホクマンリスがみつかった。シマリスなら、いままでにいくらもみたけれど、ほんもののリスが姿をみせたのは、これがはじめてであった。猟銃は、ゆだんして、トナカイにつけたままだったので、わたくしは拳銃をぬいて、一〇メートルほどの高さにいるその姿

をねらった。一発はなすと、枯れていたその枝は、リスの足もとからポキリとおれて、地におちたが、リスの姿は、はやくもとなりの木にうつっていた。それからは、みんなが騎銃や拳銃をもちだして、射撃大会のような大さわぎがはじまった。うたれるたびに、リスは、ひらりひらりと枝から枝へととびうつり、かすり傷をおった氣配もなかった。サンカさえ、騎兵銃でねらって失敗したが、とうとう本郷さんがしとめて、さわぎは落着した。

まもなく、とつぜん林がきれて、木の切りかぶばかりがのこった空き地にでた。そのまんなかに、骨組みばかりの、つくりかけの小屋がみえた。ここが基地だった。昨年、基線測量にはいった測量隊の、キャンプ地のあとであった。先発は、三日まえに着いていたが、江原は支隊をむかえにいったるすで、加藤だけがのこっていた。さいわいにして、支隊は、まだ着いていなかった。だから、テントをはるやいなや、われわれのまっ先にしたことは、小屋のよこに一本だけのこされた高いカラマツのてっぺんに、旗をあげることであった。支隊のための目じるしである。加藤がこのしごとをひきうけ、一同がはらはらしながら見まもっているうちに、とうとう二〇メートル以上もあるこずえまでよじのぼり、日の丸の旗をむすびつけた。旗はへんぽんとひるがえり、われわれの目的地到着を、山々に告げしらせた。

この旗は、しかし、まさにかろうじて間にあった。わたくしがテントのまえで、リスの解剖をはじめてまもないころ、おもいがけない銃声が、われわれをおどろかせた。支隊が着いたのであった。基地を設営して、北上してくる隊をむかえるという任務をおびた漠河隊の面目は、わずか二時間のちがいで、かろうじてたもたれたわけだ。

われわれの肩の荷は、にわかにゆるんだ。支隊の成功は、いわば、全探檢隊の成功を意味する。われわれは、支隊の成功を確信してはいたけれども、じっさいに眼でみるまでは、やはり氣がかりであった。しかし、いまや

その心配は去った。あとは、本隊の着くのを待つばかりだ。その本隊は、予定よりもよほどおくれて、まだビストラヤの中流にいた。基地に着くまでには、まだかなりの日数がかかるだろうが、その一〇〇キロあまりの道のりをとびこえて、夜の交信の電波がおくりだされていった。

一、漠河隊ハ本二〇日一七時基地ニ着ク。

二、支隊ハ基地ヨリ二キロノ地点ニアリ、土倉基地ニ來リ連絡成ル。万歳。

この電文のあとに、わたくしは、

三、現在隊ハ、馬九頭、トナカイ三四頭、米二石、パイメン二二〇キロ。

とつけくわえた。じつはいままでわたくしは、トナカイのことを、わざと本隊にかくしていた。であったときにおどろかせてやろうという、子どもっぽいいたずら氣からであった。「ヤクートガ発見デキヌタメ、案内ナシデ行進シテイル」という電文をうけとったのは、三日ばかり前のことだったが、それをよみながら、内心とくいの念をおさえることができなかった。このしらせをみて、今西隊長や、本隊の民族調査担当の件が、いったいどんな顔をするだろうか、と想像して、わたくしは電文をかきながら、ひとりでクスクスわらった。

あくる朝、川喜田はじめ支隊の一同は、雨のなかを、そろって基地にはいってきた。その服はやぶれ、靴はあわれにいたんではいたが、顔はみな元氣だった。基地は、きゅうににぎやかになった。支隊でむかえにでて、ゆきちがいになった江原も、ニコライとともにかえってきた。かれらは、クマラ河の源流ちかくまでゆき、ひきかえしてホロゴイヤの谷まできたとき、支隊のとおりすぎたあとをみつけて、一日おくれてあとを追ってきたのであった。

基地の建設は、木の伐採からはじまった。ここについてすぐ、わたくしはラオトルをよんで、加藤のたてかけ

た小屋についての意見をきいた。かれが、かつて大工をしていたことを、思いだしたからである。小屋は、四メートルに六メートルくらいの長方形で、柱を掘立て、むな木をおくところまでできていた。ラオトルは、柱をゆびさして、こんなものはいらない、といった。柱のかわりに、丸太をよこにして組んでゆけば、壁もそれでできあがるからかんたんだ、というのである。つまり、この地方の丸太小屋のつくりかただ。加藤にしても、この型の小屋はいくらでも見てきているのだが、じぶんが建てるという場合には、やはりなじみのある日本式を採用したのであろう。傳統としてもちつづけてきた文化型式というものは、環境のちがった他國にきても、なかなかすてがたいものであるらしい。わたくしは、小屋のなかのゆか張りだけを指定して、あとは、この骨組みをもとにして、自由にラオトルにやらせることにした。やがて、ラオトルの指揮のもとに、馬夫たちは、ぞくぞくとほそいカラマツを切りだし、柱にそうてそれを組みあげていった。

一方、本隊からは、ふたつの隊の労をねぎらう返電とともに、食糧補給隊を、ニジネ・ウルギーチの合流点までよこすように指令してきた。予定のおくれた本隊の食糧は、そこまでしかもたないらしかった。本隊は二七日にそこにつく予定だから、二三日に出発させるようという指令だったが、準備のつごうで一日おくれ、梅棹・川添・土倉の三人は、ニコライ、マリーネ、ショーリカと、トナカイ一五頭、馬四頭とをつれて出発した。キラムトへかえるフォーミン・イワンも同行した。おなじ日に、藤田と江原とのクマラ河源流偵察隊も、ルカシカをつれてでてゆき、いったんにぎやかになった基地は、またにわかにさびしくなってしまった。

そのあいだに、小屋は着々とできていった。カラマツの樹皮で屋根をふき、壁の丸太のすきまにはコケをつめて、四日間でみごとにできあがった。細い木をならべてつくったゆかには、炉を切らせ、うえから針金でやかんをつるした。片方の壁には、書棚をつくり、したに箱をおいて机とした。加藤は、エナメルで火の用心とかいた

図68. 基地の小屋.

札を、はりにぶらさげ、松本さんは達筆をふるって、「大興安嶺調査隊基地」とおもてに表札をかけた。それは、ひろびろとした快適な丸太小屋だった。われわれはテントからひっこし、資料の整理やオロチョンからの聞きとりのあいまには、茶をたててたのしみながら、毎日をすごした。夜はまだ寒かったが、ひるの氣温は二五度にものぼり、ハエ[1]がふえ、カやアブもではじめた。春は一瞬のうちにすぎさり、大興安嶺の樹海は、夏にうつろうとしていた。いつのまにか、林のなかから発生してきたエゾシロチョウの大群は、小屋のまわりのぬかるみにあつまって水を吸い、人がとおりすぎるとワッとまいあがって、吹雪のようにみだれとんだ。

〔註〕

① クロバエ、ヒメイエバエなど。

トナカイについて

キャンプの夜や滞在地では、トナカイはふつう放しがいにされて、自由にえさをあさっている。とらえる必要ができたとき、場合によると、にげまわってつかまらないのがあらわれる。こんなとき、オロチョンたちは、塩

のはいった皮の小袋と鈴とを手にもって、カラカラならしながら近よってゆく。いつも塩にうえているトナカイは、その音をききつけると、首をのばして、そちらからも近よってくる。すると、手のひらにわずかばかりの塩をのせ、それをペロリとなめるとたんに、首ねっこをつかまえるのである。しかし、夏がきて、吸血昆虫がふえてくると、トナカイたちは、ひるはあまり遠出しなくなった。オロチョンたちは、ちいさな焚き火をもやし、そのうえに数本の木をくみあわせて、ちいさなユルタ型のかこいをつくる(図83)。すると、トナカイたちは、アブからのがれるために、その煙のまわりにあつまってきた。かこいは、火のなかにトナカイが頭をつっこまないためである。この季節には、荷をつんだトナカイの列をひいてゆくオロチョンたちは、めいめい手にたいまつをもち、小休止のときにも、きっと焚き火の煙をたてて、トナカイのために蚊いぶしをしてやるのである。

一ぴきのトナカイの袋角の表面が、皮膚病のように、すこしただれているのをみたサンカは、ナイフをとりだして、血のでるのもかまわず、手あらくけずりとった。傳染性があるらしい。アトケイ婆さんやマリーネは、毎日トナカイの乳をしぼった(図版一六ページ)。乳は牛乳よりもこく、一日めす一頭につき、茶わん一ぱいくらいはでる。乳のでる期間は、五—九月くらいであるが、六月中旬ごろまでは、仔をそだてさせるためにしぼらない。乳は、紅茶にいれて飲む。

このように、かれらにとっては、トナカイは家族同様のあつかいをうける。トナカイがなくては、ユルタの移動もできなければ、えものの運搬もできない。[1] これらの生活とのむすびつきにおいて、トナカイは、かれらの貴重な財産となっている。結婚のときの、男から女の家へのおくりものもトナカイである。その場合の数は、ふつう一六頭で、偶数がこのまれる。かつてシャーマンのいたころには、[2] 祈禱によんだときの謝礼としても、金や物のほかに、ときとしてトナカイがおくられた。へいぜいでも、トナカイは、それぞれ頭かざりやくびかざりによ

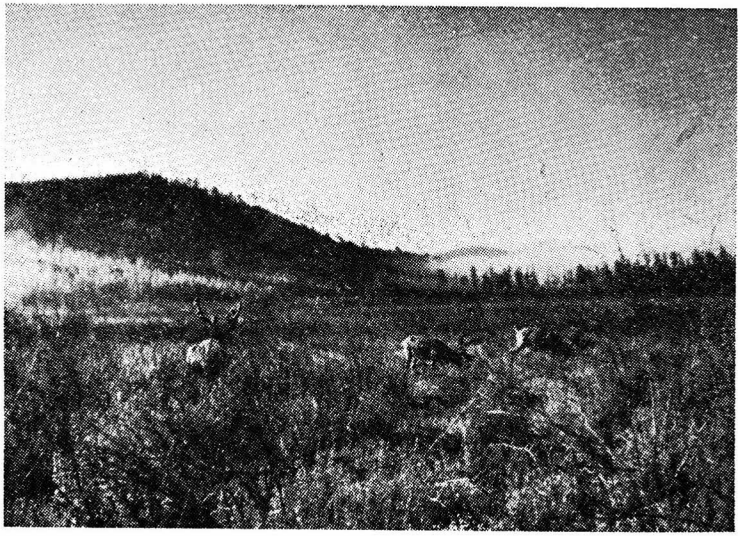


図 69.　イェルニクに放されたトナカイ.

ってかざり立てられ、たいせつにとりあつかわれているのである。その数をふやすことは、オロチョンたちにとって、單に輸送力の増大というにとどまらない、重大な意味をもつものであった。

トナカイは、二歳から一四歳までのあいだに、毎年一頭ずつ仔をうむ。ふつう一頭のめすは、八—一〇回出産しておわる。発情期は年一回、九月中旬から一〇月下旬までのあいだの約一週間であって、姙娠期間は八ヵ月、出産は、五月上旬から六月上旬のあいだである。おすのほうは、三—五歳のあいだ生殖能力があるが、六歳から九歳ごろがもっともよいという。しかし、発情期のおすは、めすのうばい合いをして傷をおったり、背の荷物をこわしたりして手におえないので、種おすのほかはすべて去勢する。去勢は、二歳のときの雪どけ季節におこなわれ、おすをおさえつけておいて、男が歯で睾丸をかみ切るのである。こうすると、多少体格は小さくなるが、おとなしく使いやすくなる。種おす一頭で、三歳のときなら六—七頭のめすに、四—五歳のときには一五—六頭に、六—七歳のときには二五—六頭に種つけができる。ただし九歳以上になると、逆に種つけ頭数はへってゆ

く。

しかし、オロチョンたちがふかい注意をもって、その増殖をはかっているにもかかわらず、トナカイの数は、むしろ反対にへってゆく傾向さえ見られる。たとえばニコライは、昨年はじめ一八頭をもっていたが、あらたに八頭うまれる一方、一三頭が死んだ。死亡の原因は、病死が四頭、のこり九頭はオオカミにくわれたのである。オロチョンたちの話では、近年オオカミの繁殖がいちじるしく、モーホ・オロチョンだけでも、年二〇頭にのぼる犠牲がでて、病死と相まって、とおからずトナカイが絶滅する可能性さえあるという。オオカミ退治には、冬にストリキニーネをしかけておけばよいが、手に入らず、オオカミ狩りに出ても、かしこくてなかなか近よれない。それにもかかわらず、ユルタのそばにいるトナカイまでおそうのである。今年はまだ被害がすくないが、夏になればひどくなるだろうというのが、かれらの心配の種であった。現在、モーホ・オロチョンの総数一〇家族の所有トナカイ数は、表8のとおりであって、当歳仔の数はわりあい多いのにかかわらず、二歳以上になると、多い家族でも一五頭、平均すれば一家族あたり一〇頭あまりにすぎない。これでは、かれらの慣習である、結婚のさいの結納にあたる一六頭の贈與さえ、維持することができないであろう。③

表 8. モーホ・オロチョンのトナカイ所有数.

家族	トナカイ数	
	2歳以上	当歳仔
ニコライ	7	6
サンカ	15	7
ルカシカ	10	2
ラジーメ	10	6
フェリプカン	15	9
アポルン	8	4
ヤーゴ	13	7
ニスチル	7	2
ピエトロ	12	5
エレーネ	4	2
計	101	50

トナカイがへって、荷物はこびに足りなくなると、たくさんもっている者から買う。一頭のねだんは四五—一〇〇円で、おなじ大き

さなら、めすよりおすのほうが高い。いまのところは、モーホ・オロチョンどうしでおぎないあっているが、昨年は、キラムト・オロチョンから五頭買ったものもあった。

この地方では、このようなトナカイの数の減少にともなう生活の脅威は、かならずしもいまにはじまったことではない。いまのトナカイ・オロチョンの移住以前には、現在のクマルチェン・ツングースがこの地域にすんでいたが、かれらはトナカイをすて、地域を移動して、馬オロチョンとなった。その原因は、やはり長年月にわたるあいだのトナカイの減少にあった、と考えられている。[4] いまのトナカイ・オロチョンも、かつて時としては、そのトナカイのほとんどすべてを失なったことがあったが、アムール州及びヤクーツク州にすむツングースから買い入れて、その危機をきりぬけてきた。[5]

過去におけるこのようなトナカイ減少の原因として、シロコゴロフは、この地域がもともとトナカイの飼養に適しないものと考え、「満洲高原はこの動物に欠くべからざる良好な牧草と、夏季における涼しい氣溫とを供しないのである」とのべている。[6] 事実、夏の高溫は病氣の流行をうながすとおもわれ、食糧の問題にしても、夏期をのぞけば、一ヵ所にながく滯在することは、地衣類の欠乏によって制限されているのである。もともと、トナカイの住むに適した環境は、はるか北方のツンドラ地帯であり、これがツングースの生活に結びついたのも、やはりその地帯であったと考えられる。そういうところでは、山野に野生のトナカイが走り、家畜としても、コリヤーク人などでは数千頭が飼養されて、乘用や運搬用ばかりでなく、肉用や毛皮用にも多量に消費されている。これらの地域では、狩猟によってくらしているツングース（たとえばラムート人）でさえ、五〇〇—一〇〇〇頭のトナカイを飼っているのである。より南方のタイガ地帯にもちこまれたトナカイをささえているのは、地衣原や灌木ツンドラのような、ツンドラ的な植物界の断片の存在であるが、タイガのなかにおける、こうしたツンドラの

断片の分布は、南下するにしたがって粗となり、トナカイの飼養環境は悪化する。大興安嶺は、ちょうどその飼育可能の限界にあたっていた。ちょうど、馬飼養の世界からいえば、馬オロチョンの生活する森林ステップが、ひとつの辺境であるように、トナカイ飼養の世界からいっても、大興安嶺はまさに辺境であり、ここでのトナカイも、それを飼うオロチョンも、周辺的な存在というべきであった。それは、背後のシベリアにおけるトナカイとトナカイ・オロチョンとによって支持されつつ、ようやく今日まで、その生活を持續してきたにすぎないといえよう。かれらが、極北地帶にみられるように、トナカイを肉用や毛皮用としてけっして屠殺しないのは、あきらかに、多数のトナカイをやしなうことができないからである。荷物をつんだり、人をのせたりするためにも、大興安嶺のトナカイの体格はちいさくて、おとった性能しかもっていない。たとえば、トナカイにのるのは、婦人や子どもにかぎられている。これもまた、周辺地域の不利な生活環境のしからしめるものであろう。現在のように、國境が閉鎖されたのち、さらにトナカイの減少がつづけば、トナカイ・オロチョンたちは、ついにそのトナカイ飼養を放棄しなくてはならなくなるだろう。[7]

もっとも、現在のトナカイの減少が、氣候や食物だけの問題でなく、オオカミによる被害がおおきく作用していることは、注意しなければならぬ。しばしばいわれる野獸の減少は、かならずしもオロチョンたちの濫獲によるものばかりでなく、かつてこの附近にわずかすんでいたノロの絶滅の原因としていわれるように、オオカミの被害による点もあるのではなかろうか。野獸の減少にもとづく食物難が、オオカミたちにトナカイをねらわせるようになったのかもしれない。近年になって、トナカイの被害がきゅうにふえたというオロチョンの話は、ある程度これをうらがきしているように思われる。してみると、こんどは、野獸の減少が逆にオオカミのふえることを制限し、やがてはふたたびオオカミの数のへる時期がくる、とも考えてよいのではないか。このような周期的

現象のひとつの山に、いまがあたっているとすれば、この時期をもちこたえさえすれば、さらにつぎの山まで、もとの生活をつづけてゆけるみこみはあるかもしれない。それにしても、オオカミの数の変動が、このようにすぐ、致命的にまで生活にひびいてくるところが、やはりこの地域の、トナカイ飼養に対する辺境的性格——不安定さをものがたるものといえよう。

もしもオロチョンたちが、トナカイを飼うことをやめなければならない時期がきたとき、かれらは、どのように生活形をかえるであろうか。そのひとつの道は、クマルチェンのように、馬飼養に轉向することであろうが、この地域が馬にとってまったく不適当である以上、そのためには、いまの馬オロチョンの領域に移住しなければなるまい。しかし、その領域は、もはやかれらを容れるだけの余地があるかどうか、はなはだうたがわしいのである。

もうひとつの道は、ここにふみとどまって、定住化の方向をたどることである。もっとも定住化といっても、かれらが狩りによって生活を維持してゆくために、このひろい地域を全面的に利用しなければならない以上、それは一ヵ所の固定家屋にだけ住むのではなく、要所々々に狩り小屋をもうけるといった形になるのではないか。現にかれらは、あちこちに、かんたんな木組みの固定倉庫[8]をつくり、運搬の労をはぶいているが（図65および70）、これを一歩すすめて狩り小屋の建設にまで発展することは、それほど不自然とも思われない。冬のあいだ、きまった土地に滞在するツングースにおいては、方形の木造家屋をたてることは、めずらしくないことだ、ともいわれているのである。[9] モーホ・オロチョンが、一ヵ所に二ヵ月もユルタを張りばなしにして、狩りの根拠地としていることも、ある意味では、もはや狩り小屋を建設しているのとかわりないともいえよう。[10]

このような狩り小屋の建設による狩猟生活は、東部小興安嶺におけるシナ人猟師（打皮子（タピーズ）という）によって、

組織的におこなわれており、いくつかの小屋の附近にしかけた、たくさんのわなを、つぎつぎと見てあるくことによって、かれらはじゅうぶんなえものを手にいれているのである。[10] ただし、このように定住化すれば、その狩りのおもな対象は、リスなどの交易用のけものにかぎられざるをえなくなり、オロチョン的生活というよりも、むしろ完全な職業的猟師生活となるであろう。現在でさえ、オロチョンの経済生活は、つぎの節にのべるように、かなりの程度にまで、職業的な毛皮生産者としての生活にうつってしまっているのであるから、定住化による生活の変化は、それほどいちじるしいものとは考えられないのである。

図 70. トナカイ・オロチョンの倉庫. 高さおよそ4メートル. ビストラヤ上流コンホ合流点ちかくでみたもの.

〔註〕

① 根據地からトナカイなしで狩りにでかけた場合は、えものの シカ類はその場で解体し、オオカミやクマに食われないよう、木のうえにおいたり、丸太で組みあげた肉入れ（長さ三メートル、はば六〇センチ、高さ五〇センチくらい）に入れ、丸太をならべたふたをしておいたりする。かえってから、その位置をしめすと、女子どもがトナカイをつれて取りにゆく。これは、皮ばかりでなく、肉も食用にいるからである。大きなハンダハンなら、ふつう七—八頭のトナカイを要する。

② モーホ・オロチョンでは、約一〇年まえに、最後のシャーマンが死んで、シャーマンに祈禱を依頼する風習はなくなったが、三河オロチョンにはなお一人、キラムト・オロチョンには二人のシャーマンがのこっている。シャーマンに祈禱を依頼するのは、病氣のときや、一—二ヵ月もえもののないときなどである。シャーマンは、ハンダハン皮の長い服を着、下には鉄製のけものの像をぶらさげて、太鼓をうつ。ひとびとは、そのまわりでかしこまり、シャーマンが神がかりの狀態になっ

たとき、たばこを出してすわせる。シャーマンは、ハンダハンの肋骨を二本もって投げあげ、落ちて上むけば吉、下むけば凶と判断する。そこで、病氣がなおるかどうか、どこそこで狩りをするのがよいかわるいかをたずねると、シャーマンは骨をみながら、その判断によってこたえるのである。

③ もっとも、トナカイ何頭として計算しても、じっさいに結納としてしはらわれる家畜は数頭にすぎず、のこりは衣服や現金でしはらう。さらに結納としておさめた家畜も、その場で婚資として返還されることがおおく、したがって、高い結納はむしろひとつの形式とみるべきである（シロコゴロフ（一九四一）前出、四四五ページ）。

④ シロコゴロフ（一九四一）前出、一二八—一二九ページ。

⑤ シロコゴロフ（一九四一）前出、一二七ページ。「例えば、二五年ほど前に、彼等はそのトナカイを全部失ってしまい、馬を好むようになったが、しかし一九一五年には、旅行や狩猟にこと欠かないだけのトナカイの数を所有し、時とすると、家族あたり数十頭に達した。」

⑥ シロコゴロフ（一九四一）前出、一二八ページ。

⑦ 國境閉鎖は、オロチョンの社会組織にも影響をおよぼす。かれらは、現在までのところ、どうにか族外婚を維持しているが、今後はそれも困難になるだろうと、みずからみとめているのである。

⑧ 食糧、衣服、器具類などをいれておく。なお図64上の倉庫も、もともとはツングースのもちいている型式であると思われる。

⑨ シロコゴロフ（一九四一）前出、五八九ページ。

⑩ 打皮子たちは、一人の把頭のもとに何人かがあつまって、組をつくり、秋から春にかけて山にはいる。かれらは、山のなかに、特異な妻入りの切り妻小屋—この入り口のつけかたは、黄土地帯の穴居小屋をおもわせる—をいくつかつくって、生活する。いまではほとんど小獣しかとっていないが、かつては、おとし穴や大規模な柵をつくって、シカ類などもとっていた。

トナカイ・オロチョンの経済生活

トナカイ・オロチョンの生活が、狩猟によってささえられていることは、すでにくりかえしのべてきた。オロチョンの社会は、その構成員のすべてが狩猟者であり、たとえ特殊な能力をそなえたシャーマンなどがいるにしても、職業の分化といえるものが、まったく見られない点において、特徴的である。その結果として、馬オロチョンについてすでにのべられているように、森林生産物以外の物資は、すべて外部の世界にあおがなくてはならず、それらの品物の種類と量とは、そとの世界との接触がふかまるにつれて、しだいに増加してきている。鉄砲と弾丸とを筆頭とする金属製品のみにとどまらず、かれらの日常生活のなかに入りこんでいる外來品は、くわしくみれば、むしろおどろかされるほどのわりあいにのぼり、馬オロチョンの場合よりも、いっそう多彩である。

たとえば、ユルタをおおう布、毛布、洋服、シャツ、帽子、巻ゲートルなどの衣料品から、ゴムぐつにいたるまで、あるいは、なべ、やかん、せともの、ほうろうびき、ガラス製などの食器類、うで輪、耳かざりなどの装飾品、紅茶、たばこ、酒、豆油、塩、砂糖、マッチなどの嗜好品や調味料、雑貨のみならず、かれらの主食までが、獸肉にかわって、外來品であるメリケン粉やアワに変化し①、くだもの、野菜までが、かれらの交易表のなかにふくまれている。このなかには、いわばぜいたく品に属するものもあるが、衣食住の基本物資の大部分が、すでに外來品によっておきかえられようとしている事実は、否定できない。

これらに対して、みずからの手で生産するものといえば、住生活においては、ユルタの骨組みや、シラカンバ皮・毛皮のおおいなど、比較的まだ比重はおおきいけれども、衣服においては、冬の皮服や皮靴を主とし、それに皮手袋やもも引きなど、いくらかの附属物がのこされている程度である。食生活においても、獸肉は、消費量はまだおおいとはいえ、すでに主食のおぎないの程度の地位にすべりおち、魚肉②や野ネギなどの副食と、肩をならべようとしているのである。そのほかの家財類では、容器類、しきもの、トナカイの装飾具など、自家製品の

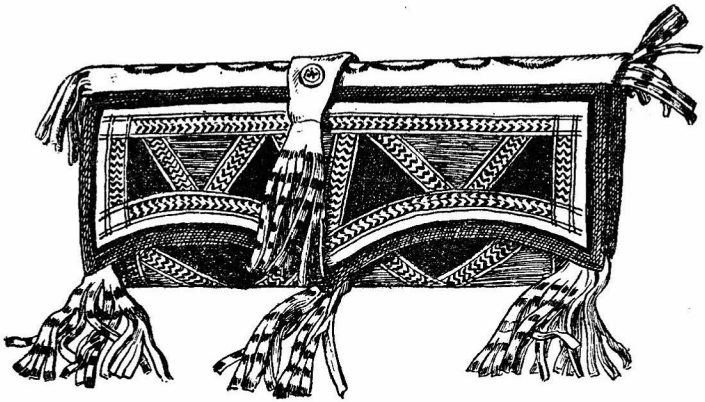


図 71.　トナカイ・オロチョンのハンド・バッグ．シラカンバの皮となめし皮でつくり，エナメルで彩色してある．

種類がかなりおおいが、一般的にみて、自家製品の生活における比重は、外來品にくらべて、しだいに小さくなりつつあるということができる。

外來品の買いいれは、ほとんどすべて、モーホの満洲畜産会社を通じておこなわれる。かれらは、毛皮類などの生産品をそこへもちこみ、その價格にそうとうする金額以内のねだんの物資を、みずからえらび、うけとってかえるのである。その金高は、どのくらいになるだろうか。一九四一年一〇月から四二年六月までのあいだに、満畜から買い入れた品の額は、表9[3]のとおりであった。

この表には、ヤーゴ、ゴシカの親子のぶんが欠けているだけで、モーホ・オロチョンの全家族の支出をふくんでいる。一年たらずのあいだの、一家の平均支出が七〇〇円以上という数字は、たとえば表1の馬オロチョンの年牧入総額三〇〇円とくらべてみても、そうとうに多額であることがわかり、かれらの購入品に対する依存度のかなり高いことをしめしている。このときの物價は、メリケン粉一キロ七五銭、塩一斤一五銭、豆油一斤八〇銭であった。

しかも、食料、衣料という、かつては大部分自給することもできた品目が、いまでは全支出の八五パーセント

表 9. モーホ・オロチョン支出表 (1941年10月—1942年6月).

氏名		家族数	全食料品 ( )内は嗜好品	衣料	日用雑貨	税金	その他	計	備考
			円	円	円	円	円	円	
ルカシカ		6	200.12 (9.40)	133.52	15.10	17.28	22.00	388.02	独立生活者
ニコライ		4	532.39 (149.25)	382.05	77.00	18.74		1010.18	
ピエトロ		5	528.77 (136.10)	322.15	133.50	35.89	21.29	1041.60	
フェリプカン		8	479.02 (114.94)	416.15	157.15	43.80		1096.12	
サンカ		6	431.17 (48.90)	117.20	46.42	19.58	12.00	626.37	
ラジーメ		6	498.60 (53.50)	280.90	44.10	15.97		839.57	
小計	金額	35	2670.07 (511.99)	1651.97	473.27	151.26	55.29	5001.86	
	百分比		53.4 (10.2) %	33.0%	9.5%	3.0%	1.1%	100.0%	
一家平均		5.8	445.01 (85.33)	275.33	73.88	25.21	9.22	833.64	
アポルン		2	239.27 (57.80)	95.18	17.60	10.33		362.38	自力では一家を支えない者
エレーネ		3	244.32 (56.10)	99.90	7.00	10.79	92.30	454.31	
小計	金額	5	483.59 (113.90)	195.08	24.60	21.12	92.30	816.69	
	百分比		59.1 (3.9) %	23.9%	3.0%	2.6%	11.3%	100.0%	
一家平均		2.5	241.80 (56.95)	97.54	12.30	10.56	46.15	408.35	
総計	金額	40	3153.66 (568.94)	1847.05	497.87	172.38	147.59	5818.50	
	百分比		54.2 (9.8) %	31.7%	8.6%	3.0%	2.5%	100.0%	
	一家平均	5	394.21 (71.12)	230.88	62.23	21.55	18.45	727.31	

モーホの満洲畜産株式会社交易部山貨交易明細簿による.

までをしめているという状態は、かれらの生活のなかへの、外来文化の滲透ぶりをものがたっているのである。もちろん、メリケン粉などの主食購入のうちには、けものの減少による食物不足という事情もあるだろうが、かれらの冬のあいだの狩りの主力が、食物にはならぬリスにむけられている点からみても、単にけものが足りないから主食を買うというのではなくて、むしろ、主食そのほかの購入を予定することによって、④狩猟活動のほうを、その方向に調整させているも

のとおもわれる。衣料についても、おなじことがいえるであろう。してみると、かれらの狩りは、單なる自給自足時代の延長ではなくて、かれらみずから意識しておこなうところの商品生産であり、あたらしく獲得した外來文化を、たとえ形式的にもせよ維持しようとする努力のあらわれである。生活慣習の面では、ふるい傳統がいまなお多く保存されてはいるが、その経済活動には、近代経済機構の一端につながる、職業的な猟師集團としての性格が、しだいに強くなりつつあるのである。

この点をもっとはっきりさせるために、かれらが一年間にえた。猟獣の頭類をしらべてみよう。サンカやルカシカたちからききとった、一九四一年のえものの数は、表10のとおりである（オロチョンたちは、おたがいに、だれがなにを何頭とったか、正確におぼえている。かれらの社会の連帯性をしめすものであろう）。

これらの獣のうち、ハンダハンは七月におおくとれるのであるが、ちょうどこの頃は、当局の命によってキラムトへ出ているので、冬にとる数がおおい。リスは、もちろん冬猟である。なおクマはたくさん見かけるがあまりとらず、オオカミもとってい

表 10.　モーホ・オロチョンの狩獵表 (1941).

氏名(年齢)	ハンダハン	アカシカ	リス	クマ	イノシシ	備考
ルカシカ(33)	14頭	2頭	69頭	5 (大 3 小 2)	9	
ニコライ(40)	6	8	154			
ヤーゴ(47)	2	3	220			親子
ゴシカ(20)	6	9				
ニスチル(27)	2	4	180			
ピエトロ(37)	8	5	210			
フェリプカン(36)	8	8	150			
サンカ(39)	5	0	107			
ラジーメ(22)	14	6	75			
アポルン(74)	0	0	70			老齢
エレーネ(59)	0	0	0			寡婦
計	65	45	1235	5	9	
平均*	7強	5	129強			

* 平均には，一人前でないアポルンとエレーネとをのぞいた．

ない。

さてこのえもののうち、自家消費にあてられるのは、ハンダハンやアカシカの肉と、ハンダハンの皮とであって、そのほかはもっぱら交易用である。たとえば、アカシカの皮は二〇—三〇円、袋角は一〇〇—二〇〇円、尾は二〇—九〇円、リスの皮は一円五〇銭ないし三円五〇銭で賣れる。冬にもハンダハンやアカシカをとっているのにかかわらず、純粋交易用のリスの狩猟高が、一家平均一三〇頭にのぼっているのは、さきにのべたオロチョン経済の商品生産的性格をしめすものといえよう。かつてチャン・クェイ・タンが猟師であったころの一年のえものが、ハンダハン三—五頭、アカシカ一—二頭、リス一〇〇—三〇〇であったことを思えば、オロチョンたちの現在のえものは、内容的にも、シナ人猟師にくらべて、たいしたちがいはないものといえる。しかもチャンさんは、その狩りにあたって、トナカイももたず、ただいくつかの小屋を根拠にするだけで、それだけの收穫をえていたのである。もちろん、そのころのほうが、いまよりはけものが多かったであろうが、オロチョンたちが、冬の狩りにいくらかの力をくわえさえすれば、たとえトナカイをうしない、なかば定住化したとしても、いまの生活は維持できるのでなかろうか。チャンさんのことばによれば、いまでも、ラオコウ附近だけで、一冬に二〇〇くらいはリスがとれるはずだが、だれもとっていないという。いまのオロチョンたちの定住化をさまたげているものは、ながいあいだの移動生活の傳統と慣習、トナカイに対する愛着などの、たぶんに社会心理的な要素であって、一度トナカイをうしない、その補充がむずかしくなった場合は、おおきな生活の変化なしに、さきにのべたような定住化へとうつりえられるように、経済面ではすでに準備ができているとも考えられるのである。そうなったあかつきでも、かれらは、この森林帶の最高の利用者として、そとから他の力がくわわらないかぎり、依然として狩猟社会は維持してゆけるであろう。ただし、その社会は、すでにトナカイ飼養からはなれた

表 11.　モーホ・オロチョンの収入表(1941年10月—1942年6月)

氏名		家族数	ハンダハン	アカシカ	リス	その他	計	備考
ルカシカ		6	131.00	300.00	135.00		566.00	独立生活者
ニコライ		4	128.00	1167.00	324.50		1619.50	
ピエトロ		5	95.00	685.75	144.40	36.50	961.65	
フェリプカン		8	214.50	711.35	422.00		1347.85	
サンカ		6	195.50	241.25	233.30	20.00	690.05	
ラジーメ		6	105.50	742.25	167.00	42.00	1056.75	
小計	金額	35	869.50	3847.60	1426.20	98.50	6241.80	
	百分比		13.9%	616%	23.9%	1.6%	100.0%	
一家平均		5.8	144.92	641.27	237.70	16.42	1040.30	
アポルン		2	133.00	197.50	141.75	13.00	485.25	自力で一家を支えない者
エレーネ		3	116.00	382.40			498.40	
小計	金額	5	249.00	579.90	141.75	13.00	983.65	
	百分比		25.3%	59.0%	14.4%	1.3%	100.0%	
一家平均		2.5	124.50	289.95	170.88	6.50	491.83	

存在であることは、いうまでもない。しかも、トナカイの生活空間としては辺境にあたるこの地域では、この種の狩猟社会のほうが、あるいは安定なのではあるまいか。

狩りの生産物の賣り上げ高は、表11にしめされる。

生産品を交易にだすときには、シカ類の皮はなめし、おおくは加工して持ってゆく。なめすのには、皮がまだやわらかいうちに毛をむしりとり、四角い木わく(図83)に張って日に乾し、小刀で両面の汚物をけずり落す。それから、ハンダハンの脳をとかした水につけ、汚物が出ればけずりとり、皮がやわらかくなるまで四—五回つづける。そして、最後に手でよくもめば、なめしあがるのである。加工は、手藝品として出す場合がおおく、五本指の手袋に、色糸でロシア風にししゅうしたものなどは、もっともふつうである。リスの皮は、なめすことなく、そのまま交易に出している。

表11において、とれる頭数のおおいハンダハンの賣り上げがすくないのは、もちろん自家用消費がおおいためであるが、それでも、交易に出せるだけの余分のあることは、注意に値する。アカシカは肉は自家用、皮や袋角などは交易用として高價に出せる点からいって、現在のオロチョンの交換経済の中核をなすものともいえる。しかし、リス猟だけでも收入の二五パーセントにちかいことは、やはりかれらの経済が、單に自家消費の余分を交易に出すといった域からぬけ出し、商品生産を目的とする狩猟に轉化していることをしめすものといえよう。しかも、かれらの総收入が一家平均一〇〇〇円にちかいことは、たとえ、けものが減少したとはいいながら、その生産活動がじゅうぶんに成功していることをものがたっており、かれらの物質生活をその要求する文化財でいろどりうる余裕をあたえているのである。（以上六節　森下）

〔註〕

① たとえば、ルカシカが一九四二年になってからの（最初は一月一三日）主食の買い入れ量は、メリケン粉一〇袋、アワ二袋（一袋は二〇キロ入り）であった。われわれにであったときは、食糧欠乏でモーホに買い入れにゆくところだったから、五ヵ月たらずのあいだに、合計二四〇キログラム、小さい子どもたちまでくわえての一家六名の、一日のメリケン粉とアワの消費量は、平均一・七キログラム、となる。

② 漁は、河をせきとめるカーデというせき（図81）をもうけたり、もりでついたり、銃でおよぐ魚をいとめたりする。モーホ・オロチョンは、いまではあまり漁をやらないが、それでも、小さい川で、じぶんたちの食べる程度はとっている。

③ この表の内容は、つぎのとおりである。

一、食　料――主食物としてメリケン粉、アワ、ときに白米。調味料として塩、こしょう、油類。かんづめ。紅茶、ときに磚茶。嗜好品は、おもにウォツカ、白酒などの酒類、および砂糖。

二、衣　料――布地を主とし、プラトーク、糸など。まれに毛布。

三、日用雜貨――おもに、たばこ。その他石けん、食器、なべ、やすり、バリカン、カレンダー、雨衣など。

四、税　金――賣りあげ高の三分。そのつど、山税として徵集する。

五、その他――物資運搬費（ルカシカ）、前借りの返済（ピエトロ）、物資のかわりに現金支給（エレーネ、満畜交易所以外で物資にかえたものとみなして、支出にくわえる）など。

④　メリケン粉は、一人一ヵ月夏は半袋、冬は一袋までの配給をうけることができる。

クマラ河水源の偵察

大興安嶺の主稜にそうて北上した支隊のルートは、その西がわにかぎられていた。分水嶺をこえた東がわに、すこしでもふみこんでみたいという欲望は、ナーラチでわずかにみたされたにすぎなかった。それも、ほんの数歩をこえることなく……。

補給隊が出発してから、本隊が基地につくまでの期間は、基地にいのこった隊員たちにとって、この欲望を満足させるべき、絶好の機会であった。藤田、江原、ルカシカの三人のささやかな隊は、補給隊の出発した二四日のひるすぎ、三頭の馬に六日ぶんの食糧をつんで、基地をあとにした。目標を、ビストラヤ、アルバジハ、クマラの三つの河の分水界附近におき、オロチョンのように軽快な機動性を発揮するため、いっさいの重装備を持参しなかった。ルカシカも、この地域の地理にはくわしくない。しかし、藤田にとっては、白色地帯のもつ不氣味な圧迫感は、すでにとりのぞかれており、コンパスひとつをたよりに、ぶじに基地に帰還できる自信があった。

まず、基地のちかくで東からながれこむ、ロチョウコウの一支流をのぼりはじめた。基地を中心として、測量網が東西にほそながくのびているので、まず比高二〇〇メートルくらいの尾根上にたてられた三角点にのぼり、目的の方角をながめてみることにした。比高一〇〇メートルあたりからハイマツがあらわれ、頂上ちかくでは、

シラカンバの二次林のしたに、あおあおと密生していた。谷そこの花崗片麻岩は、いつのまにか、安山岩にかわっていた。めざす南東の方向をながめると、森林限界をぬいた、一座の円頂峯があり、まわりの山なみから、一段とぬきでていたので、まずこれを目標とすることにした。その夜は、ロチョウコウの最源流部にごろ寝した。多人数の隊からはみでたせいか、われわれには、内地の低山をあるくときのような氣やすさと、オロチョンになったようなたのしさとがあった。

夜のうちに、馬が一頭基地ににげかえったので、ルカシカは徒歩になった。人により上手下手はあるが、トナカイ・オロチョンたちが、だれでも一應は馬にのれるのは、興味があった。この日は、ひくい峠をこえて、ニジネ・ウルギーチの支流にはいった。クマラ流域に達するためには、こうした小支流を、何本かよこぎらねばならない。地図のないところでは、こうした行進はもっともむずかしい。オロチョン道は、すでになくなっていた。あらかじめ見当をつけておいた方向に、コンパスと勘とをたよりにすすむほかはなかった。ルカシカの手にもたれた、長柄の大なたは、極度に威力を発揮し、かれの右手がサッとふられるたびに、かなり太い木も、こころよい音をたてて切りたおされ、みるみる馬のとおれるような道がひらけていった。

三本の小支流をこえたのち、目標とする山の北がわを開析する、かなりふかい谷にはいった。時刻は三時をすぎていたが、その日のうちに登ることにきめた。はじめは、シラカンバを主とする二次林であったが、東のほうにある小鞍部に達すると、ハイマツが密生していた。のぼるにつれて、ハイマツの密度はまし、足どりをにぶらせた。

頂上に立ってみると、かろうじて森林限界に達した程度で、いじけた数本のシベリアアカマツがはえていた。アカマツが森林限界にまで達しているのは、この地方でもめずらしい。このアカマツによじのぼって、クマラ河

図 72.　クマラ河水源への峠，ハナゴケの下生え，ハイマツ密生.

の水源方面を偵察した。南東東の方向には、一四〇〇—一五〇〇メートル級とおもわれる、完全なゴレッツ二座をふくむ、かなり急峻な連嶺が、すみ絵のように、スカイ・ラインをかぎってつづいていた。ゲン河とクマラ河との水をわかち、大興安嶺と小興安嶺とをつなぐ、イルフリ・アリンであった。主稜の西がわの河川にくらべると、ゲン、クマラのふたつの河の開析がすすんでいるために、かなり急峻な山形をあらわしているのであろう。イルフリ・アリンをながめ、その山形とゴレッツの存在とをあきらかにしただけでも、この偵察行のねうちはじゅうぶんであった。われわれは、はるかなスンガリーに思いをはせて、しばらくは声もなかった。いま立っている山頂は、一三〇〇メートルくらいであろうか。その位置は、大興安嶺の主分水嶺から、やや西よりにかたよった位置にあることが確認された。われわれは、ここを、かりに南望山とよぶことにした。

第二夜は、もとの谷に下って、野宿した。ルカシカは、銃にものいわすべきえもののないのをなげきながらも、まめまめしく食事のしたくをし、あいもかわらぬせんぎり大根を腹につめこんだ。

二六日は、野営地の谷をまっすぐ東につめて、主稜をこえる峠にでた。よくふみならされたオロチョン道が通じていた。轉石は、石英粗面岩であった。日数の関係上、あすはアルバジハ流域にはいらなくてはあぶないので、この日は、時間のゆるすかぎりクマラ河を下り、引きかえすことにした。

はじめてふみこんだクマラ河の谷は、西がわの谷にくらべると、深く、かつせまいものであった。しかし、植物や礫原など自然の景観には、たいした変化はなかった。大興安嶺の分水嶺が、ひくい平凡な峠にすぎないものである以上、分水嶺をこえたからといって、さっと眼をうばうような景観の変化が期待できるはずのないことは、とうぜんわかっておりながら、やはり期待はずれの感じをいだかざるをえなかった。五キロばかり下り、北から流れこむ支流との出合に、馬のないルカシカをのこして、さらに下流に馬をはしらせた。オロチョン道はつづき、ところどころに、ふるいユルタのあとをみた。谷のはばは二〇メートル、川原は、かつてみなかったほどせまく、東にながれるクマラ河の頭部浸蝕が、西がわの谷にくらべて、はげしいことをものがたっていた。われわれは、一〇キロばかりでひきかえした。期待していた、そのあいだのルカシカの猟は、やっぱり不首尾におわっていた。かれのうでまえがわるいのではなくて、ふしぎに鳥一羽いないのである。

二七日は、クマラとアルバジハとの分水界をこえた。峠をおりかけると、すぐにオロチョン道にでた。あいかわらず、山火事のあとがおおい。アルバジハの水源は、ひろびろとした河谷原をもち、どちらに流れているかわからないくらい平坦であった。この谷をすこしさかのぼって、また峠をこえ、つぎの谷にでて一泊した。流れの方向からみて、アルバジハ水系にぞくするものにちがいない。ルート・マップを整理してみると、基地は、ほぼ西の方角にあたるはずだ。しかし、乗馬でふくざつな山なみをこえながらつくったマップには、いささか自信がない。食糧ものこりわずかになってくると、ふたたび白色地帯の不安がもどってきた。ルカシカも、子どものと

きに一度きたことがあるだけだ、と心ぼそいことをいう。

二八日、ロチョウコウとの分水界とおもわれる尾根にとりつき、基地の方向にむかって突進した。灌木が密生して、馬をつれての行進は、なかなかの苦労だった。尾根をこえた西がわの谷は、北に向きをかえることなく、どこまでも西に向っていた。これで、ロチョウコウにでることはほぼ確実となったが、はたして基地より上流にでるか下流にでるか。場所いかんによっては、まだそうとうなまよい道を覚悟しなければならないだろう。谷には、保存のよい段丘面のところどころに、ユルタのあとがある。

四キロばかりも下ったころであろう、ルカシカが奇声をあげた。ひょいと頭をあげると、見おぼえのある尾根が、眼のまえによこたわっている。まさに、第一日にのぼった三角点の尾根だ。われわれは、一分のくるいもなく、ちょうどもとの場所にかえってきたのであった。（藤田）